
ヘタレな小説を書く、ヘタレ作家の父。と、隣で色々やる私。

国後旺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタレな小説を書く、ヘタレ作家の父。と、隣で色々とやる私。

【Nコード】

N5002E

【作者名】

国後旺

【あらすじ】

父はあまり反響のない作家であった。しかし、その原稿に対して打ち込む様は、しながら原稿の紙の神に左肩を鷺掴みにされ取り付かれているかのごとき様で、父の右肩を鷺が鷺掴みにしていた…。今、非日常非現実至上主義文学が「小説を読む」をクリックした瞬間に始まる。ということとはさながら今でもないし、始まらないのかもしれない。

すつきりとしていて、力強く、短くて、上中下の中程度の音を父が持つ万年筆が奏できるように父が万年筆で原稿に文字を生み出していく。

全身全霊の力という力を抜いて原稿に文字を生み出していく後ろ姿からでも内容が分かってしまうような気にさせる、腰を曲げたヘタレな父の姿をヘタレな文才でヘタレ文学として書き連ねるあまり反響もないヘタレな作家の父の姿を、全身全霊の力という力を抜いて私は真面目顔で凝視していた。つまり全身全霊の力という力を抜いていた気がしていただけだ。

休日や祝日や定休日や振り替え休日や休日の夕方などなどの休む為の日時の時ですら、どこかの出版社に出して貰える本の基となる原稿に文字を生み出していく父はさながら何かに取り付かれるか、文学の紙の神に左肩を驚くワシく掴みにされるかのごとき気迫に満ち溢れていて今にもその気迫が零れ落ちそうだ。その代わりに汗を畳に零して畳を湿らせた。つまり全身全霊の力という力を抜いていたように見えただけだった。

そして父の右肩には驚が肩を驚掴みにしている。父の愛驚の「Qちゃん」である。

今にも、恐ろしく響く目覚まし時計よりも恐ろしく響くジャイアンの歌声よりも恐ろしく響く桜の狂い咲きの網羅のなかのジャイアンの歌声のような鳴き声を、私の向かいにある窓から叫んで青空高く雲よりも高く高く飛ばして行きそうだ。勿論鳴き声を、だ。

と思っていいたら驚は父の肩で糞を垂らした。この驚の糞はシャレ

にならないほどに臭い。そんな中でも父は原稿に文字を生み出している。愛鷲、Ｑちゃんの一大事に気付きもせず、自分の着ている袴はかまくの右肩の部分の一大事にも気付いてはいない。この集中した空間に水を差す訳にはいかないとなんとなく考えた私は、この強烈な臭いを我慢しようとし一瞬思ったがやはり臭くて我慢できずに手元にあつたハサミで父の着ている袴を切り裂いて私の向かいにある窓から投げ捨てた。

ついでに「くせえ。くせえ。くせえ」というセリフも三回程吐き捨てた。

ちなみに、上半身が裸になった父は今の自分の姿の奇妙さに気付きもせず原稿に文字を生み出している。今が夏だから良いものの、冬だったらさすがに凍え死ぬだろうかと、ふと考えながらヘタレ作家である父の後ろ姿：上半身裸バージョンとそこら辺に散乱していた官能的な小説とを交互に私は見ていた。

ちなみに、Ｑちゃんは父の地肌の右肩を鷲掴みにしている。父の肩から血が流れていたが、肝心の父は黙々と原稿に文字を生み出しているのだ、まあ気にすることでもないのだろうかと、ふと考えながらヘタレ作家である父の後ろ姿：上半身裸＋右肩を鷲に鷲掴みにされて血を流しているバージョンとそこら辺に散乱していた官能的な小説とを交互に私は見ていた。

しかし父が何故、ここまでして文学を書き続けるのか気になったが、鷲のＱちゃんがまた糞を垂らさないかどうかの方が気になって仕方なく、とりあえず鷲の首を鷲掴み、父が原稿に文字を生み出している机の引き出しに鷲を押し込んでおいた。この中に入るとまるで死んだように大人しくなるので、私はこれで安心だと思って安心し、疲れから眠りにつくことにした。

しばらくして目を覚ました私の目に止まったのは、父の、原稿に文字を生み出している姿である。ここで驚いたことは、父の肥えた体躯が瘦けた体躯に反転していたことだ。それほどになるまで原稿に文字を生み出していたのだろうか。そうなるまでの道のりを目に焼き付けられなかった自分に数秒悔いたが、今は寝起きの腹の虫をどうにかする方に思考の視点を向けることにした。

が、それもまた一瞬のことで、父の思考回路がなんとなく知りたくなったので、枕にしていたボーリング球程の大きさのハンマーで父の頭をぶつ叩いた。すると父の頭蓋骨が粉々になり、ゆで卵の殻を剥いたばかりのようなツルツルに輝く脳みそが露わになった。触ればゼリーのようなプルプルとした触感である。

しかし、ゆで卵と決定的に違うのは色である。ゆで卵は白いが父の脳みそは金色だ。大きさはダチヨウのゆで卵と大差ない。

ちなみに、父は何事もないかのように済ました顔で、原稿に文字を生み出し続けている。

しかし、この脳みそをどうすれば父の思考回路が分かるのだろうか。考えても分かるハズもなく、とりあえず触ってみるとゼリーのようなプルプルとした触感である。そのプルプル感に触発された私は、ちょうど手元にあったスプーンで少しすくって食べてみた。

これはうまい。うまい。うまい。んまい。

あまりの旨さに興奮していた私は遂に両手で脳みそを鷲掴み、父の地肌剥き出しの肩を皿にして、ハンバーガーを食べるように脳みそを平らげた。ここで一つの問題が生じた。脳みそを食べてしまっ
ては思考回路を分析するなどおそ不可能だ。父も考えることなど
できまい。ちなみに、腹の虫が鳴くのをやめていた。

しかし、父は何事もなかったかのように済ました顔で、原稿に文

字を生み出し続けている。

これには私もさすがに興奮した。さすがの私もさすがに興奮した。どうなっているんだと訊きたくて、父の瞳に直に触れて私の存在に気付かせた。そして「どうなっているんだ」と訊くと「何が」と聞き返してきて私は「思考回路が」と付け加えた。すると父は父の向かいにある鏡を見て自分の現状に気付いた。上半身裸のうえに頭蓋骨上部が粉々に碎けており中身が無いのである。

これには父もさすがに興奮した。さすがの父もさすがに興奮した。「そうか」となにやら一人で納得する父。そして父は「私は能無しだからヘタレな小説を書けるのだ」と言った。

しかし、私としてはそんなことはもはやどうでも良く、何故父の脳みそが旨かったのが気になっていた。

そこから私は旨い脳みそを作る為の研究を始めたのである。

（後書き）

タイトルがここまで小さくできることに感動した所存です。（ケータイ読者には意味のない後書きですので、気にしないで下さい。本当にくだらないことなので）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5002e/>

ヘタレな小説を書く、ヘタレ作家の父。と、隣で色々とやる私。

2010年10月12日08時13分発行